

中学校における思考力・判断力・表現力の育成  
～英語科の事例を通して～  
言語文化系教育サブプログラム

長谷川 歩香

【指導教員】 及川 賢 武田 ちあき 田子内 健介

【キーワード】 思考力・判断力・表現力 英語 GS 科

## 1. AI と英語教育

2022年11月OpenAIという企業がChatGPTをリリースした。ChatGPTとは、チャット形式で、こちらからの質問や要望に応じてくれるものである。例えば、こちらが「私は来年度から英語科の教員になります。今は不安と期待の両方を感じています。以上の文を英語にしてください。」と入力すれば、ChatGPTは、「I will become an English teacher from the next academic year. Currently, I feel both anxious and hopeful.」と約10秒ほどで答えてくれる。これはまた、DeepLも同じである。DeepLとは、31言語に対応している翻訳ツールで、主にドイツ語やフランス語、オランダ語などのヨーロッパ系の言語に対応している。Googleが提供するGoogle翻訳という機能も同様に広く使われており(2023年5月の時点で133言語に対応している)、AIを利用した翻訳技術は急速に身近なものになっている。AIが人々に認知されはじめ、様々なものが影響を受けた。教育もそのうちの1つである。英語科も例外ではない。ChatGPTを駆使すれば、英語学習に教師が不要となる可能性もある。例えば、ChatGPTに英文を貼り付けて「この英文を日本語に直してください。」と入力すれば、ほぼ完璧な日本語訳が出来上がるし、音声合成AIと一緒に使用すればリスニングにも対応できる。

このChatGPTでの英語学習の良さとして、谷口(2023)は、「英語学習を完全に個別化でき、24時間いつでもどこでも自分専用の英語の先生になってくれる。」(p.3)と述べている。AIが発達すると、英語を学習する意義や、英語科教員は本当に必要なのかという疑問が生まれる。AIがあれば、たとえ英語を話すことができなくても英語で意思疎通は簡単にできるし、24時間いつでもどこでも英語を教えてくれるAIがいれば、わざわざ英語科教員のもとへ向かいお互いの時間を考慮することもなくすぐに正しい英語を知ることができる。ChatGPTは数多あるweb上のサイトから情報を得て回答を作成している。信用するに値する情報かどうかに関してはまだまだ厳しいところもあるが、それでも生身の人間よりもはるかに膨大な情報を持っていることは確かである。

一方で、文部科学省はChatGPTなどの生成AIを教育現場で使用することは全面的には推奨していない。つまり、小中高生がAIを教室で自由に使える環境ではない。文部科学省の『初等中等教育段階における生成AIの利用に関

する暫定的なガイドライン』(2023年)によると、「生成AIを使いこなす力を意識的に育てる姿勢が重要」とされていて、創造性や批判的思考力などへの影響があることから、「限定的な利用から始めることが適切」としている。生徒における生成AIの利用が不適切としている場面を、「生成AIの性質や限界について学習せずに使用する」、「詩や俳句の創作、美術などの生徒の感性や独創性を発揮させたい場面で最初から安易に使わせる」、「定期考査や小テストなど学習評価に関わる場面」としている。また、「夏休みの読書感想文や日記、コンクールへの作品応募などで、生成AIを使ったにもかかわらず、自分で作成したとして提出することは不正行為であり、自分のためにならない」と十分に指導する必要があるとしている。

逆に生徒による生成AIの利用が適切だとされる場面としては、「班の考えをまとめる活動の途中で足りない視点を見つけ、議論を深めるために使う」、「高度なプログラミングを行う上で適切に用いる」としている。

しかし、AIの使用を止めることできないし、今後使われるケースは今後増えてくるだろう。そうなれば学校教育における英語学習はどのような立ち位置になるだろうか。その一つが、思考力・判断力・表現力の育成であり、本研究では、英語科における思判表とは何かを考え、具体的な指導案を検討する。

本研究は、学校現場における教育実践力を高度化し、思考力・判断力・表現力とはどのようなものなのか、一人ひとりの子どもに思考力・判断力・表現力を身に付けさせる上で必要な専門的実践的知見を得るための研究を行うものである。実地研究校であるさいたま市立上大久保中学校で、中学1年生のGS科(=グローバル・スタディ科/ほかの市町村での英語科)の授業を参観させていただくことや、生徒数人のサポートをさせていただくこと、また数回のGS科の授業を受け持たせていただくことを通じて研究を行った。さいたま市立上大久保中学校では、読解力向上のための研究をされていたので、その授業も参観させていただいた。ここでは教師が独自に作成した、教科書には載っていない設問が用意されていた。それらのことから、英語における思考力・判断力・表現力とはそもそもどのようなものなのか、具体的にはどのような力を思考力・判断力・表現力と呼ぶのか、生徒に身に付けさせるために教員がするべき指導はどのようなものであるのかということを考察した。

実地研究 I では、第 1 学年 GS 科にお世話になり、日常の学校生活から合唱コンクールをはじめとする学校行事に参加させていただいた。そこで、英語科の思考力・判断力・表現力とはいったい何なのか、中学生段階で英語を本格的に学び始めたという時期にどのように思考力・判断力・表現力を身に付けさせるよう指導できるのか考察した。

## 2. 思考力・判断力・表現力の育成に何が必要か。

学校教育法第 30 条の第 2 項では「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」とされており、学力の重要な 3 つの要素として (1) 基礎的・基本的な知識・技能 (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等 (3) 主体的に学習に取り組む態度が示されている。その中でも (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等について、英語科でどのような授業が求められるのかを研究テーマとする。

平成 20 年答申においては、学習指導要領における言語活動の充実の基本的な考え方を踏まえつつ、学習指導要領の改訂に当たって充実すべき重要事項の第 1 として言語活動の充実を挙げ、各教科等を貫く重要な改善の視点として示した。中学校においては、平成 20 年 3 月に公示された「中学校学習指導要領」の総則には言語活動の充実について、「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」とされている。「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の 4 技能習得が求められる中で英語科ではどのような指導をするべきかについても考察した。

## 3. テーマ設定の理由

学習指導要領改訂に伴い、各教科での評価項目が「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力」へと大きく変化した。思考力・判断力・表現力等とは、具体的に、平成 30 年度告示の『中学校学習指導要領の解説総則編』には、「(1) 物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程 (2) 精査した情報を基に自分の考えを形成し表現したり、目的や状況等に応じて互いの考えを伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程 (3) 思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」の大きく 3 つが示されている。各教科で児童・生徒の「知識・技能」、「思

考・判断・表現等」、「主体的に学習に取り組む態度」を育てていくには教員としてどのような授業展開をして、どのように児童・生徒に教授していくことが求められるのだろうか。

しかしながら、評価項目の「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力」がある中で、私自身は、「思考・判断・表現等」の項目において具体的にどのようなことができる力を「思考力・判断力・表現力等」と呼ぶのか、どのような基準で評価すればよいのか想像ができない。そこで、今回は評価規準の中でも主に「思考力・判断力・表現力等」に焦点を絞って考察した。

評価をする際に、一定の評価規準が必要となってくる。評価規準とは、平成 20 年 1 月の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の『学習指導要領等の改善について』」の答申では、「学校や教師は指導の説明責任だけではなく、指導の結果責任も問われていることを前提としつつ、評価の観点並びにそれぞれの評価の考え方、設定する評価規準、評価方法及び評価時期等について、今回の学習指導要領改訂の基本的な考え方を踏まえ、より一層簡素で効率的な学習評価が実施できるような枠組みについて、更に専門的な見地から検討を行う」とされている。中学校段階に入ってくると、学校の成績/評価というものが進学に大きく関わってくる。学校の成績のレベルによって志望校はどこにするのか、中学校段階では進学する高校の確約はどこからもらうのか、高校段階では指定校推薦など顕著に表れる。学校の成績が生徒の進路のすべてではないが、学校の成績が生徒の進路に大きな影響を与えることに間違いはないに等しいだろう。

このように、学校の成績というものは生徒の人生に大きく関わるのもであり、成績に関わる評価の具体的な例やその基準というものは一定のものがなければならない。

ここでは「思考・判断・表現等」の評価基準やそれに関わる事象だけでなく、英語科の「思考力・判断力・表現力等」の育成に及ぼす影響とその授業構成についても提案する。

このような背景によって、今回は中学校に焦点を絞って、生徒の「思考力・判断力・表現力等」の育成についてをテーマとするに至った。

## 4. 生徒の思考力・判断力・表現力とは何か。

### 4. 1 生徒が求めていることは何なのか。

私が学部時代の教職課程の履修中から現在まで考えていることは、生徒は一体どのくらい英語ができるようになりたいのであろうかということである。生徒自身が、将来日常会話レベルの英語力を身に付けたいのか、あるいは、とりあえず今いる学校を卒業して次の進学先を決められるくらいの英語力を身に付けたいのか、それによって英語科の教師が目の前にいる生徒にどう授業を展開するのか決まってくる。それとは別に生徒たちの保護者の希望もあるだろう。例えば、英語を仕事で使えるくらいの英語力を身に付けさせたいであるとか、あるいは、とにかく留年/浪人を

せずに次のステップに進めるくらいに多くある教科の1つとしての英語力を身に付けさせたいであるとか、保護者の希望にもさまざまあるだろう。授業を行う上での基準である学習指導要領はあるものの、生徒や保護者のニーズに合った授業展開が求められる。赴任した先の生徒の学力レベルや生徒が望む志望校に合わせることも必要である。「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力」といった生徒に身に付けさせて評価をする規準が決まっても生徒は1人1人学力レベルも違ってれば、望みの違う。果たして今の中学生たちはどれくらいの英語力を得られることを望んでいるのであろうか。

埼玉県さいたま市では英語科をGS科(グローバル・スタディ科)という名称と設定し、英語教育に力を入れている。さいたま市のホームページによると、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を一貫したカリキュラムの下で、「聞く」「話す」「読む」「書く」4つの技能をバランスよく学び、将来、グローバル社会で主体的に行動し、たくましく豊かに生きる児童生徒を育成している。中学校では、学習指導要領が示す標準時数よりも〇〇時間多い17時間ほど英語の授業を多く設けている。また、さいたま市では「イングリッシュ・キャンプ」や「英語ディベート大会」など英語を使ったイベントが催されている。

前述のとおり、私は実地研究でさいたま市立上大久保中学校にお世話になり、GS科の授業を中心に参観させていただいた。あくまでも私の主観であるが、中学校1年生の段階で私が思っているよりも生徒から発せられる英語の量が多いと感じた。ALTの先生も生徒とコミュニケーションを取ろうとしていて、生徒とハートのハンドサインを送り合ったり、休み時間も生徒と笑いあっている様子を多く見かけた。ある1人の男子生徒は、「I'm sleepy. Tomorrow,宿題 is very 多かった。」というように英語で表せる部分以外は日本語で補ったりしながらALTの先生と話していた。私はその様子を端から見させていただいていたのだが、生徒たちは日常英語を使いこなせるようになりたいからであるとか、一般的に使われているようないわゆるいい高校に進学したいからであるとかではなく、ただ「楽しいから」ALTの先生と話しているのではないかと感じた。その「英語が楽しい」という気持ちが生徒の英語力を伸ばすために最も重要なものではないだろうか。

#### 4.2 思考力・判断力・表現力を持っているということ。

思考力・判断力・表現力があるとなりをできるようになるのだろうか。文部科学省の『児童生徒の学習評価の在り方について』(平成31年11月)によると、思考力・判断力・表現力等とは「問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと(問題発見・解決)や、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多

様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと(協働的問題解決)のために必要な力」とされている。つまり、道筋を立ててある程度の予測をしながら行動し、その後、省察を行い次につなげる力のことである。さらに文部科学省の『新しい学習指導要領等が目指す姿』(平成27年11月)によると、問題発見・問題解決のプロセスの中で、「問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせ、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考、必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意思決定、伝える相手や状況に応じた表現」のような思考・判断・表現を行うことが重要だとされている。つまり、どれか1つではなく、学力の3要素である(1)基礎的・基本的な知識・技能(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等(3)主体的に学習に取り組む態度それぞれの資質能力を組み合わせる総合的に身に付けることが求められている。思考力・判断力・表現力がある、ということは、基本的な知識や技能も主体的に学習に取り組む態度も持ち合わせている、ということになる。

それならば、英語科において思考力・判断力・表現力を持っているということとはどのような状態にあるということなのだろうか。『【新学習指導要領を踏まえた思考力・判断力・表現力の考え方】』によると、英語科における思考力とは、「取り扱う題材を深く理解して処理できる力、課題を見出す力」であり、「条件が変わった、視点が変わったなどにより、結果がどう変わっていくか、その変化でどういう事象等が生ずるか、どういう関係性が生ずるか、どういう価値が生まれるかなど、直接文章や図表などで示されていない事象について考える問題などがこれに当たる。また、混濁した情報を識別・整頓する力などが一例として相当する。」とされている。次に英語科における判断力とは、「取り扱う課題や関係性に対してある尺度、基準、条件を当てはめ分類・順位付け・優先順位づけ・規則性発見、統合等の判断・発見、論理的推論を進められる力」であり、「関係性を道筋だてて思考させた上で新たな基準、条件、意見、多様な価値観を踏まえて最善となるものを見出す問題」などがこれに当たる」とされていて、最後に英語科における表現力とは、「思考、判断により獲得した情報を正確に処理して絞り込み、抽象化、関連付けなどを行い、他者に伝達する意図を持って、文章や図表、グラフ等で可視化できる力」であり、「ある事象の変化、関係性、順位付けなどに対する状態を、最適な文、要旨、図表、グラフ等で表現しているものを選択させる問題などがこれにあたる」とされている。

ここで新たな疑問として、英語科における思考力・判断力・表現力は英語力なのか、それとも情報収集力や国語力なのか、はたまた感覚的で直感的なものであるのかということも生まれる。あくまでも先述の通り、文部科学省の『新

しい学習指導要領等が目指す姿』では思考力・判断力・表現力を「問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと（問題発見・解決）や、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）のために必要な力」として、英語ができることなど言語力に長けていることという制限はしていない。しかしながら、英語力における判断力である「判断・発見、論理的推論を進められる力」では、自分の中で自分の考えをある程度言語化し、英語科における表現力という部分である「他者に伝達する意図を持って、文章や図表、グラフ等で可視化できる力」につなげるためには、自分の言葉で他者に伝えるという言語力が必要になってくる。そういう面ではやはり、英語科における思考力・判断力・表現力とは、英語力というものに近いものであるのだろうか。

#### 4.3 英語科における思考力・判断力・表現力の重要性

文部科学省は、学力の3要素を、(1) 基礎的・基本的な知識・技能 (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等 (3) 主体的に学習に取り組む態度としている。そのなかでも、(2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等に注目する。

先述のように、2022年11月にOpenAIという企業がChatGPTという生成AIを開発した。文部科学省によって、生成AIの使用法に関するガイドラインが作成されたが、文部科学省は、生成AIの学習面での使用を全面的には推奨していない。しかしながら、これからはChatGPTだけではなく、多くの生成AIが開発されるだろう。これからの時代を生きていく生徒たちにとって生成AIの使用は今よりもっと身近になる。そこで、英語科教員をはじめ、教員たちは生成AIを遠ざけるのではなく、どのように使用すべきか教え、考えることが求められるだろう。

英語は言語のうちの1つであり、必ず受け取る相手がいる。例えば、自分が書いた手紙を受け取って読む相手、今朝食べた朝食について「おいしかったよ」と伝える相手などである。思考力・判断力・表現力とは、英語のHow（どうやって）やWhat（何を）に当たる部分である。しかしながら、中学生にとって、その部分を学習することは容易ではない。なぜなら、自分の中にある、英単語や英文法をかき集めて、つなげて、言葉として発さなくてはならないからである。これは、日ごろから自分の意見を日本語で言う練習や、英語で自分の意見を言う練習をしていないと難しい。子どもにとってだけではなく、大人にとっても同じで、いきなり「はい、あなたの意見を発表してください。」と言われても戸惑ってしまうだろう。ましてや、日本語で表現できないものは、英語ではできないに決まっている。

しかし、英語の授業の中で、思考力・判断力・表現力を重視しすぎると、日本語ばかりの内容になってしまう。ここに教師の英語力が大きく関わってくるのである。

#### 4.4 「英語力」とは。

文部科学省の『生徒の英語力向上推進プラン』によると、英語力とは、「英語4技能によるコミュニケーション能力」とされており、英語での「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」を行うことによって、他者とコミュニケーションを取る力が英語力とされている。授業内で生徒の英語力を養うためには、教師として何が求められるのだろうか。文部科学省の『生徒の英語力向上推進プラン』によると、生徒の英語力の課題は「話す、書くの課題が大きい。英語が好きではないなど学習意欲にも課題」とされており、教師として「話す、書くの活動に関する指導力や英語力に課題」があるとされている。

まず、生徒の課題についてに関する「話す、書くの課題が大きい」と教師の課題に関する「話す、書くの活動に関する指導力に課題がある」という2つの課題には関係性があると考える。教師側に話す、書くの活動に関する指導力に課題があるのであれば、生徒の話す、書くの力は向上しないだろう。日本人の英語に対する悩みの1つとして、書けるけれど話せない、であったり、単語は知っているけれど書けない、というものがある。

英語力と思考力・判断力・表現力とはどのようなかわりがあるのだろうか。そもそも英語科で思考力・判断力・表現力を養うなら、英語力と思考力・判断力・表現力は大きなかわりがあるのではないかと。英語での「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の4技能を使って他者とコミュニケーションをとって問題を発見して、自分の考えをまとめ、他者に伝え、他者の意見と自分の意見を比較して合体させ、問題解決し、そのプロセスを最終的に省察するという一連の思考力・判断力・表現力の工程では、すべての工程を英語で行うに限らず一部を英語で行うにしても、やはりある程度の単語力や熟語力を知っていることや、それを英文法のルールに則って組み合わせる文章にし、話せるという能力は必要になってくる。たとえば、国語科で思考力・判断力・表現力を養うにしてもある程度の国語の能力は必要であるし、数学科で思考力・判断力・表現力を養うにしても同じようなことが言えるのではないだろうか。英語科に限らず、各教科で思考力・判断力・表現力を養うことが求められている現在の学習指導要領では一見すると多様性を意識して得意や不得意が異なるクラスという1つのチーム内で協力するという他者理解、自己表現があり、できないことも受容してもらえんといったような感じに受け取れるかもしれないが、よく考えると、思考力・判断力・表現力を養うという項目は、ある程度の学力を保持しているという前提で、という前置きが隠れているのかもしれない。

英語力と思考力・判断力・表現力は大きなかわりがあり、グローバル化が急速に進む現在の日本では英語を使っ

て他者と何かを作り上げることが求められている。

## 5. 得た知見

### 5. 1 実地研究で得た知見

実地研究とは、埼玉大学教職大学院で行われているものであり、1年次14日間と2年次24日間となっている。前述の通り、私はさいたま市立上大久保中学校で経験させていただいた。

さいたま市立上大久保中学校でのGS科の授業で興味深い授業があった。1年生のあるクラスでのGS科の授業で、アフリカに住む兄妹の通学方法や通学路、勉強する理由について取り上げていた。

アフリカに住むその兄妹は、毎日片道2時間もかけて学校に通っている。しかも、その兄妹が歩く通学路は、ゾウやキリンなどの野生動物が多く生息している地域にある。兄は妹を守りながら、安全に注意して学校へと向かうが、当然、ゾウやキリンなどの野生動物が多く生息している地域の通学路は、私たちが使ってきたアスファルトで平らな道だけで構成されているわけではなく、草木が生い茂り、アップダウンが激しい道りである。通学路には、ゾウやキリンなどの野生動物が多く生息していて、その野生動物が襲ってくる危険性が常にはらんでいる。通学中に野生動物と遭遇したら、その兄妹は草陰に息をひそめて身を隠す。この兄妹には、このような危険な通学路を通ってまで学校に通い、学びたい理由がある。

この物語は映画化もされていて、授業では、その映画の予告編も取り扱っていた。授業の中で、その物語の内容を扱う本文を読み、単語学習を終え、先生は生徒たちに向かって、「みんなは毎朝2時間もかけてまで学校に行きたいって思う？」、「みんなはどうして毎日毎日勉強しているの？」と発問していた。私は、その様子を拝見していて、この発問は思考力・判断力・表現力を育むものになるのではないかと感じた。この発問には正解がない。生徒たちによって答えはそれぞれ変わる。生徒たちは、自分自身と登場人物を重ね合わせて、「自分だったら」と考えをめぐらす。自分自身と登場人物を重ね合わせるからこそ、思考力・判断力・表現力を育むために必要なものなのではないだろうか。文部科学省の『新しい学習指導要領等が目指す姿』によると、問題発見・問題解決のプロセスの中で、「問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせて、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考、必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意思決定、伝える相手や状況に応じた表現」のような思考・判断・表現を行うことが重要だとされている。アフリカに住む兄妹の物語を扱ったこの授業は、まさに、『新しい学習指導要領等が目指す姿』の「必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意思決定、伝える相手や状況に応じた表現」になるのではないだろう

か。

また、生徒たちが、自分自身と登場人物を重ね合わせ、考えをめぐらす際に、私は、生徒と登場人物が同世代にあるということが、その活動をより行いやすくする1つのポイントになるのではないかと考える。生徒が自分自身と重ね合わせる登場人物が「自分と同世代にある」という条件があると、生徒は登場人物に親近感がわき、自分とは全く違うという驚きや、逆に自分と似ていてどこか仲間意識が芽生えたりするのではないだろうか。生徒と年齢が離れた比較対象だと、少し難易度が増す。生徒は未来や過去の自分と、登場人物を比較することになり、未来や過去の自分を想像して比較するという点が難点である。しかしながら、職業体験や将来の夢を考える行事や授業の中で生徒が自分の選択をする際に1つの価値観として役立つかもしれない。

### 5. 2 現場の先生方へのインタビューから得た知見

私は、地元の中学校で「学生ボランティア」をしている。その中学校でお世話になっている先生に思考力・判断力・表現力についてインタビューをさせていただいた。

① 「思考力・判断力・表現力」の観点で行っている活動についておしえてください。

授業の最後に、「今日の授業で学んだこと」と「授業の感想」を3分くらいで書かせている。行間や文字数は指定していない。

② 「思考力・判断力・表現力」のテストはどのように行っていますか。

スピーキングのテストを行う際に、ALTとの会話で、時間に合った挨拶や、資料を受け取った際の「Thank you.」、資料を返す際の「Here you are.」、テスト終了時の「Thank you. See you again.」などこちらが指示しなくても言葉にしたことを点にしている。

③ 「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」は一緒にとお考えですか？それとも別だとお考えですか？

個人的は一緒に扱いたいですが、ある程度の基礎力がないと、思考に行き着かない。そのため、授業では、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を別扱いして進めている。できれば、同時進行で扱えればいいのだが…。

このような3つの質問をさせていただき、ご回答いただいた。インタビューをさせていただく中で、先生は「思考力・判断力・表現力とは何かわからない。」とおっしゃっていた。これは、実地研究を行わせていただいたさいたま市立上大久保中学校の先生も同様であった。

このことから、私は、その難しいと感じるゆえんには、英語科という科目の特性にあるのではないかと考える。前述のように、『【新学習指導要領を踏まえた思考力・判断力・表現力の考え方】』によると、英語科における思考力とは、「取り扱う題材を深く理解して処理できる力、課題を見出す力」であり、「条件が変わった、視点が変わったなどにより、結果がどう変わっていくか、その変化でどういう事象等が生ずるか、どういう関係性が生ずるか、どう

いう価値が生まれるかなど、直接文章や図表などで示されていない事象について考える問題などがこれに当たる。また、混濁した情報を識別・整頓する力などが一例として相当する。」とされ、英語科における判断力とは、「取り扱う課題や関係性に対してある尺度、基準、条件を当てはめ分類・順位付け・優先順位づけ・規則性発見、統合等の判断・発見、論理的推論を進められる力」であり、「関係性を道筋だてて思考させた上で新たな基準、条件、意見、多様な価値観を踏まえて最善となるものを見出す問題」などがこれに当たる」とされ、最後に英語科における表現力とは、「思考、判断により獲得した情報を正確に処理して絞り込み、抽象化、関連付けなどを行い、他者に伝達する意図を持って、文章や図表、グラフ等で可視化できる力」であり、「ある事象の変化、関係性、順位付けなどに対する状態を、最適な文、要旨、図表、グラフ等で表現しているものを選択させる問題などがこれにあたる」とされている。英語とは言語であり、何かを思考したり、判断したり、表現したりする「ツール」の1つなのである。何かを思考したら、判断したら、表現したら、英語が生まれるのではなく、「英語を使って」思考し、判断し、表現する必要がある。

## 6. 実践例の提示

### 6.1 思考力・判断力・表現力の観点における実践例

授業で思考力・判断力・表現力を養うためには発問が重要になってくる。田中(2022)によると、発問には3つの種類がある。

1つ目は、事実発問である。事実発問とは、テキストの大まかな情報を読み取らせるもので、教科書本文に書かれた語句や表現を使って生徒が答えられるものである。これは知識・技能の部分に当たる。

2つ目は、推論発問である。推論発問とは、テキストに書かれた情報と生徒の背景知識を総合して考えさせるものである。これは思考力・判断力・表現力の部分に当たる。

最後は、評価発問である。評価発問とは、本文を読んでどう感じたか、どこが面白いと感じたか、自分だったらどのように行動するかなどを考えさせて述べさせる。この評価質問には唯一の正解はない。これは思考力・判断力・表現力の部分に当たる。

これらの発問方法を基に、英語科の教科用図書の開隆堂中学校1年生 *Sunshine English Course 1* を題材に発問例を提示する。

【Sunshine English Course 1 Program6 The Way to School 内 Think②】 (日本語訳)

〈事実発問例〉

- Is Savanna a dangerous place?  
(サバンナは危険な場所でしょうか。)
- Why is savanna dangerous place?  
(なぜサバンナは危険な場所なのですか。)

- Why does Jackson go to school?  
(ジャクソンはなぜ学校に通うのでしょうか。)  
〈推論発問〉
- Does Jackson like studying?  
(ジャクソンは勉強が好きですか。)
- Will Jackson be tired when he gets to school?  
(学校についたらジャクソンは疲れているのでしょうか。)
- Does Jackson have to get up early every day?  
(ジャクソンは毎日早起しななければならないのでしょうか。)

〈評価発問〉

- If you were Jackson, would you go o school?  
(もしあなたがジャクソンだったら学校に通いますか。)
- Do you wanto to spend two hours going to school every day?  
(2時間かけて毎日学校に通いたいと思いますか。)
- What part of this story did you find interesting?  
(この物語の中でどこが面白いと感じましたか。)

【Sunshine English Course 1 Program8 The Year-End Event 内 Think②】 (日本語訳)

あらすじ

登場人物：ダニエル(Daniel)、ダニエルの母(Helen)  
ダニエルの母は、おせち料理づくりに挑戦している。  
おせち料理の中の栗きんとんを作っていて、息子ダニエルに手伝いを求めている

〈事実発問〉

- Why was Daniel called by his mother?  
(なぜダニエルは母に呼ばれたのでしょうか。)
- What was Daniel' s mother doing?  
(ダニエルの母は何をしていましたか。)
- What kind of dish is *kurikinton*?  
(栗きんとんとはどのような料理ですか。)  
〈推論発問〉
- Is Daniel willing to help his mother?  
(ダニエルは母の手伝いを進んで行うでしょうか。)
- Is it hard for us to cook New Year' s dishes?  
(おせち料理を作るのは大変でしょうか。)
- When do you start cooking New Year' s dishes?  
(おせち料理はいつ作るでしょうか。)

〈評価発問〉

- Is there anything you do at the end of the year?  
(あなたが年末に決まって行うことはありますか。)
- Do you eat New Year' s dishes every year?  
(あなたは毎年おせち料理を食べますか。)
- What is in your New Year' s dishes?

(あなたの家のおせち料理は何が入っていますか。)

特に重要なのは評価発問であると考えられる。そのためには事実をしっかり押さえたり、直接書かれていないことも読み取る力が必要である。

発問は英語で行うことが好ましいが、学習段階により英語での発問や解答が難しいと判断される場合には、日本語で行うことが考えられる。

### 6. 2 思考力・判断力・表現力を育む活動例

教科書を使った思判表の活動として、3段階の発問を用いることが考えられる。以下に例を2つ示す。

① 同じ意味の2つの英文を提示してどう違うか考えさせる活動  
例文：トムは人生で1度も雪を見たことがない。

- ① Tom never saw snow in his life.  
(↑過去形の文)
- ② Tom has never seen snow in his life.  
(↑現在完了形の文)
- .....
- ① トムは1度も雪を見たことがないし、これからもない。  
(トムは亡くなっている可能性がある。)
- ② トムは今までは1度も見たことがない。  
(これから雪を見る可能性がある。)

※2人~3人で相談し、考えさせる。

② 助動詞の強さで文を並び替える活動  
例文：あの少年はトムです。  
(That boy is Tom.)

他教科では教える対象そのものが思考力判断力の対象になるのが、英語は英語という言語が思考力・判断力・表現力の対象となる。そのため、英語そのものについて生徒が思考・判断する機会を与えることが考えられる。

※グループなどの複数人で相談し、並べ替える。

各グループにカードを配布して考えさせる。  
(カード例)

must be	will be	would be
should be	can be	may be
might be	could be	

- ④ • That boy must be Tom. (100%あの少年はトム)  
(あの少年はトムに違いない。)
- That boy will be Tom. (95%あの少年はトム)  
(あの少年はトムだろう。)
- That boy would be Tom. (90%あの少年はトム)  
(あの少年はトムかもしれない。)
- That boy should be Tom. (70%あの少年はトム)  
(たぶんあの少年はトムだ。)
- That boy can be Tom. (50%あの少年はトム)  
(あの少年はトムだということがありうる。)
- That boy may be Tom. (30%あの少年はトム)  
(たぶんあの少年はトムだろう。)
- That boy might be Tom. (25%あの少年はトム)  
(ひょっとしてあの少年はトムかもしれない。)
- ⑤ • That boy could be Tom. (20%あの少年はトム)  
(もしかしたらあの少年はトムかもしれない。)

この活動例は、文法を教え込むような授業とは異なり、生徒が思考し判断することが重要となる。

### 7. 最後に

私は埼玉大学教職大学院での学習や実地研究、また地元の中学校での学生ボランティアを通して、「中学校における思考力・判断力・表現力の育成～英語科の事例を通して～」というテーマで研究してきた。

本報告書の目的は、学校現場における教育実践力を高度化し、思考力・判断力・表現力とはどのようなものなのか、一人ひとりの子どもに思考力・判断力・表現力を身に付けさせる上で必要な専門的実践的知見を得ることであった。研究方法としては、埼玉大学教職大学院の1年次の実地研究Ⅰ、2年次の実地研究Ⅱ、論文研究、地元の中学校でのインタビューを用いて研究を行い、その結果、以下の2点が明らかになった。

第1に、生徒たちが、自分自身と登場人物を重ね合わせて、「自分だったら」と考えをめぐらせ、自分自身と登場人物を重ね合わせるからこそ、思考力・判断力・表現力を育むために必要なものの1つではないかということである。教科書の本文などに出てくる登場人物が、自分と似ているのか、または全く違うのか、もしも自分がその登場人物だったらその登場人物と同じ生き方を選択するのか、考える活動が生徒の思考力・判断力・表現力を育む1つの例として挙げられる。

第2に、英語科における思考力・判断力・表現力とは、英語自体が目的にはならないということである。

例えば、他教科の理科では、実験で生徒自身が考えながら次の工程に進み、生徒自身が知りたいことを知るために実験を行う。理科では、教科そのものが思考力・判断力・表現力を用いて行う活動の目的になりうる。しかしながら、英語科は他教科とは少し異なる。英語科は言語を扱っていて、言語とは、何かを伝えたり、表現したりするためのツールのうちの1つである。そのため、英語科という教科自体が思考力・判断力・表現力を用いて行う活動の目的にはならない。英語科における思考力・判断力・表現力を育む活動では、「英語を使って何かを思考し、判断し、表現する」ことが求められる。「英語を使って」という部分がとても重要なのである。

これらの結果は、先行研究で、平川・萬谷（2018）は、「日本の教材には理解を重視した活動が多く、様々な思考レベルを含む活動をバランスよく取り入れるべき」としていたことに対し、具体的にどのような活動をすればよいのかという新たな知見を付与することができる。

しかしながら、英語科における思考力・判断力・表現力とは、英語自体が目的になるという考え方もできる。なぜならば、思考力・判断力・表現力を使って創り出したものが、英語を通して相手に伝わるということが英語科における思考力・判断力・表現力と言えるからである。英語とは言語であり、英語を使って相手にものごとを伝える1つのツールなのである。

最後に、本研究の残された課題と今後の発展について主に2点書く。

1 つ目の課題は、発問の種類と例の提示である。毎回同じような発問では、生徒の思考力・判断力・表現力の育成には役立たない。ある程度レベル分けしてある発問の例を提示する必要がある。2 つ目の課題は、教師からの発問に対する生徒からの返答へのフィードバックの方法についてである。やはり、生徒の力を伸ばすためには、思考力・判断力・表現力の育成に関わらず、教師のフィードバックの技術が大きく影響する。生徒からの返答に対する有効なフィードバックの方法

を知り、技術を身に付ける必要がある。

最後に今後は、現場の先生方の声をお聞きし、私自身が教師として、生徒たちの思考力・判断力・表現力を育むために何が有効で、教師ができることは何かを実践を通して考えていきたい。

本研究の遂行にあたり、指導教官として終始多大なご指

導を賜った、埼玉大学教職大学院の及川賢先生に深く感謝申し上げます。また、学生ボランティアとして受け入れ、インタビューにご協力いただいた現場の先生方に深く感謝申し上げます。

#### 【参考文献】

- 佐藤玲子. (2016). 「教師に求められる英語力、指導力、教育力」, 『亜細亜大学課程教育研究紀要』, 4, 10-26.
- 谷口恵子. (2023). 『AI 英語革命』リチェンジ.
- 平川晴菜, 萬谷隆一. (2018). 「思考力・判断力の視点からの国内外の小学校英語教科書・教材における活動分析」 『北海道教育大学紀要（教育科学編）』, 2018, 69, 139-149.
- 文部科学省. (2011) 『言語活動の充実に関する基本的な考え方』
- 文部科学省. (2015). 『新しい学習指導要領等を目指す姿』
- 文部科学省. (2015) 『生徒の英語力向上推進プラン』 ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906\\_01\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906_01_1.pdf))
- 文部科学省. (2019) 『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』 ([https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602\\_1\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602_1_1_1.pdf))
- 文部科学省. (2023) 『初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン』 ([https://www.mext.go.jp/content/20230718-mtx\\_syoto02-000031167\\_011.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230718-mtx_syoto02-000031167_011.pdf))

#### 【資料】

国立高等専門学校機構

「新学習指導要領を踏まえた思考力・判断力・表現力の考え方」 ([https://www.kosen-k.go.jp/Portals/0/upload-file%20folder/04\\_%E5%AD%A6%E5%8B%99/admissions/sample2022/sample\\_English.pdf](https://www.kosen-k.go.jp/Portals/0/upload-file%20folder/04_%E5%AD%A6%E5%8B%99/admissions/sample2022/sample_English.pdf))

さいたま市教育委員会 『さいたま市の英語教育“グローバル・スタディ”』 (<https://www.city.saitama.lg.jp/003/002/008/101/001/p062652.html>)